

形御土藏役所より出火焼失。當役所足輕篠田五郎兵衛と云ふ者役所印を爲似、切手を調へ質物に入れ置く旨露顯し、被召捕處、則ち右役所の火付くる旨申顯す。是帳面等を燒き捨て可申との由。依而於上口重刑に被處とあり。堂形奉行は湯淺氏の藩國職員通考に、寛文年中大窪九郎兵衛・青山金右衛門勤之、同三年後藤治右衛門延寶の初めより四人宛勤之、後々まで連綿すとあり。改作所舊記に載せたる寛文十年六月算用場よりの達書に、去年人々爲作候朝鮮米、たうばし御用之旨に候條、粗の儘に而御堂形へ馬借を以て着届、御奉行請取切手取置可申など見ゆ、延寶六年八月改作奉行の達書に、御堂形之内御島部屋といふ事なども見ゆ、此の時代は御堂形と稱し、奉行の役所ありし事知られけり。但し堂形藏奉行の名は、寛永年中より見ゆれば、役所も其の頃より建築ありたるなるべし。

○高島平右衛門・甲斐藩第

三壺記に云ふ。慶長十一年十一月晦日宇賀祭の宵の事なるに、雷電影敷ひゞき渡り、金澤御城天守に落ちかゝり焼け上り、風強くして薄雪なり。大森所に火の懸り、御本丸

御新宅まで一字も不殘焼失に及ぶ。南の堤の臨に三十三間の的場あり。天守焼け上るとひとしく、石垣の上より利長卿大音上げて、平右衛門と御呼び被成しかば、平右衛門奉りて、答へ奉る言葉と共に懸け出し、御城中へ懸け入り、上下御昵近・家中の者きらひなく引廻し、御前様並に女中を引きつれ、宇喜津内記屋形へ入れ奉り、其の外の女中は中川宗伴へ入れ奉ると云々。按ずるに右火災は寛永系圖傳及び村井長明の象賢紀略に、七年十月晦日とあり。利長卿石垣の上より大音にて呼び給ふとあるもの、此の頃は本丸に居給ふゆゑ、本丸の高石垣の上より呼び給ひたるもの也。石垣下堂形的場の横に、高島平右衛門其の子甲斐の第宅ありし故也。平右衛門は高島石見守定吉の弟にて、九歳より利家卿に奉仕す。其の子甲斐も利家卿・利長卿に奉仕す。甲斐の子は左京といへり。

口上之覺

一、本堂形以前者、近藤甲斐守屋鋪と申候。其の節御藏無御座候。御米藏出來以後、堂形与申候。年數六十年許に罷成候様に覺申候事。

一、右甲斐守屋敷跡に御書院出來、梁間五間許、行間十四五間許与覺申候。其の御書院の前大石がきの方に御泉水幅六・七間許、長さ二拾間許と覺申候。同御書院より東の方にぼたん山御座候。外廻懸扉に而御座候。内に御植込に被爲御付候様に覺申候。御露地圍之躰覺不申候御事。  
一、同所御書院より北の方、御堀折目より十四五間許かみの方に、長さ七・八間許、幅六・七尺許の橋御座候。大石がきの方より七尺許引上申様に仕在之候。其の節車橋与申候。其の所より本丸に上り申す坂在之様に覺申候事。  
右先年私儀、御城中御普請御仕事に罷出申候に付而、有増覺如此に御座候。其の外年久取儀に付、覺無御座候。以上。

越中組大工肝煎與三右衛門父歳八十七

九月二十日

淨雲

右は舊藩五世參議中將綱紀卿穿鑿し給ふにより、口上の趣を聞き記し、古覺の繪圖を造り、口上書を添へて一覽に入れたるもの也。年號干支をも記載せされば、年曆詳ならずといへども、既に上文にもいへる如く、寛文年中にかゝる

堂形書院古覺圖

